

本には書けない
慶應小論文合格 BIBLE

はじめに

本書では、拙著「慶應小論文合格バイブル」で触れることができなかった、小論文に関する重要なポイントをご紹介します。

① ページ数の問題で掲載できなかったもの
② 書籍に掲載するには不適切けれども、慶應大学に合格する為にはぜひ知っておいていただきたいこと

③ 小論文の点数が上がる事

主にこの3点の内容を中心に編集しました。

論理とは何か、思考とは何か、「どう人は思考するのか」という点だけではなく、「どうすれば人の思考力は極限まで引きあがるのか」ということについても、本書ではご紹介し

ていきます。

世間では、小論文の指導といえば、「書き方に関するものである」と思われていますが、実質的には書き方そのものに関する指導は全体の割合の中では大きな割合を占めません。

なぜならば書き方だけを教わってもほとんど意味がないからです。なぜ書き方だけを教わってもほとんど意味がないのでしょうか。その理由は、拙著「慶應小論文合格バイブル」でたびたびご説明してきましたが、小論文試験の問題を解く際には、分析、思考、論述の3ステップで問題を解くからです。書き方だけを教わっても論述の部分だけしか対策をとることができません。

人が文章を書くことができない主な理由は、適切に考えることができないからです。また小論文とはそもそも何なのかということに対する理解が曖昧な人は、どんなに小論文の書き方を学んだとしても、決して小論文を適切に書くことができないようにはなりません。

それではどのようにすればいいのでしょうか。きちんと学んだ上で適切に考えなければなりません。本書では紙面の都合上、書籍に掲載することができなかった内容を中心に紹介していきます。

まへづき : Short essay Bible 本には書けない慶應小論文合格バイブル

- ・はじめに
- ・受験生の意見が求められるケース（例外的ケース）
- ・SFCを受けるなら、本を100冊読むのも一つの手
- ・出題意図と設問の要求
- ・出題意図

- ・大減点を防ぐ出題意図の見抜き方
- ・要約はするべきか、しない方がいいのか
- ・評価基準
- ・何の話？
- ・何の話？パート2
- ・情報の当たりづけ
- ・思考力は情報のあたり付の精度で、決定される
- ・理論は理論にすぎない
- ・下書きの重要性
- ・問題設定のやり方
- ・提案型の小論文
- ・評論家の文章ってどういう事？
- ・抜書きをやめよう

- ・ 分析力について
- ・ 事実ベースで論証する
- ・ 思考方法のコツ
- ・ 局所的に考えると失敗する
- ・ 小論文の書き方
- ・ 意見のデータ化
- ・ 総論を書こう
- ・ プレゼンテーション問題の解き方
- ・ 文章のつながり
- ・ 文章のメタ化
- ・ 課題文を踏まえてと書かれていたら・・・
- ・ 感情を重視する問題が存在する
- ・ 口語的ではなく文語的

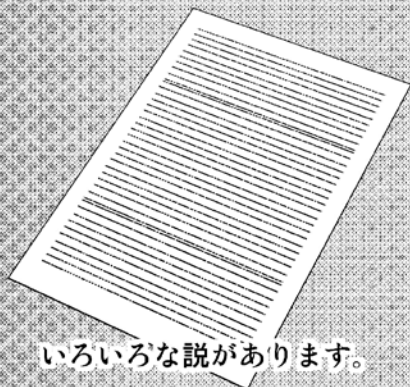
- ・ 時間切れ対策
- ・ 純粹な要約問題の書き方のスタンス
- ・ 読み手の頭の中をイメージしよう
- ・ 情報収集はパソコンでも行う
- ・ 分析とは何か
- ・ 情報についてのあたり付の精度を高める二つ目の力
- ・ 整理しなさいと要約しなさいの違い
- ・ 分かりやすくすればするほどいい
- ・ 論点が複雑な場合の論述方法
- ・ 論証と考えなくてもいいケース
- ・ 設問に無い事
- ・ 過去問題で学ぶ分析
- ・ 問題解決のアプローチについて

- ・聞かれた事に答える
- ・2010年度の総合政策学部小論文問題解説
- ・的確な情報収集、判断力
- ・説明しなさいという設問の解き方
- ・体験談について
- ・必ず書き上げると決める
- ・点を取りやすい構成
- ・設問の要求に厳密に
- ・問題設定の理想的な数
- ・論理のつじつま合わせ
- ・理由の作り方
- ・本には書けないこと、冊子にも書けないこと
- ・何が思考をつくるのか

- ・考える力を引き上げる重要な3つのポイント
- ・音楽を聴きながら勉強をしよう。
- ・徹底的に練習する
- ・抽象度を引き上げる
- ・テーマの抽象性が高い場合の対処法
- ・課題文の内容が大変説得力がある場合
- ・グラフの見方
- ・起承転結を使うケース
- ・構造ノートの使い方
- ・構造議論チャートについての解説
- ・小論文試験は屁理屈をこねる文章ではない
- ・人の信用を低下させる事が狙いの情報とのつき合い方
- ・理由を話すことができるかどうか？

- ・人間が《自分の思考は正しい》と認識する理由
- ・ありのままの目と先入観
- ・インターネットでの情報収集の注意点
- ・批判情報の読み方
- ・匿名性文化が犯罪を助長する時代の転換期にある
- ・慶應クラスが他の塾とは違う点

小論文ってなんだ？



小論文とは
試験

学生を選ぶ
為のもの

いろいろな説があります。



このように
書きなさい

いい
ですね?

完璧
マニアック



テクニックで勝つ!!

コを性ス!!

先生



ワシは物理専門
だから知らん

うん...



これが
正しいのだ!!

こうじゃなきゃ
ダメ!!

小論文はどう書くべきなのか？

前提

目的



合格

実態



どんな指導の点数が高いのか？
短期間で合格しているのか？
論文とはそもそもどの様なものか？

価値観



各学部(研究科)の価値観
その他大学の価値観

これらの内容をふまえて
まとめたのが
次のページの図です。

どのように書くべきかについては
他の社会問題と同様
議論され続ける事も大切です。



前提①

大まかな書き方の
ルールや作法はあっても
絶対に書かなくては
いけないという
決まりはない



確かな事

確かな事

より妥当な考察の
ポイントは
思考の土台を
確かな所に置く事です。

前提②

こういう事は
書いてはいけない
という事が
たくさんある

前提③

小論文とは何か？
という細かい事がわかっていても
力が伸びないと
書けるようにはならない

前提④

”論文”ではなく
論文試験

常に世の中の物事を正しいか正しくないかで
白黒ハッキリ分ける事はできません。



学校のテストとは違って
世の中には答えのない問いがたくさんあります。



「慶應小論文合格バイブル」では、「受験生の意見を聞きたい人はこの世にいない」という事情を詳しく書きました。それでは、一切受験生は意見を求められていないのでしょうか。実はそんなことはありません。

若い人の中にも優れた考えを持っている人はいます。また、非常に頭のいい人がいます。私がここで述べた頭の良さとは一元的なものではありません。

人の頭の良さは、感性が優れている、想像力が優れている、思考が精緻であるなど、いろいろなタイプの頭の良さがあります。アイデアや柔軟な考えが優れている事もあります。バランスがいいこともあります。

特に大人が欲しているのは、優れたアイデアです。優れたアイデアに年齢は関係ありません。そういう意味で、意見そのものが求められるのは、博識で優れた思考力から導かれる意見というよりも、柔軟なアイデアや着想かもしれませぬ。

これらの点については、慶應大学では比較的小論文の問題に組み込まれて問われること

が多いので、頭を柔らかくして、普通の人が考え付かないアイデアで、かつ現実に対応でき、現実を変える力を持つアイデアを生み出す力を高めることが必要です。アイデアを生み出す力を高めることが、慶應大学の小論文対策になることもあります。

小論文試験で受験生の意見を聞きたい例外的なケースというのは、その場合、新規性のあるアイデアだというふうに考えておきましょう。

SFCを受けるなら、本を100冊読むのも一つの手

本を100冊読むというと、(とんでもない!) というように考える方もいるかもしれませんが。

しかし私は、100冊くらいの読書は、多いものではないと考えています。私が、どの本を読めばいいですか、と質問をされて、困惑するのはこのような理由があるからかも

しません。

つまり、「どの本を読めば受かるか。」という問いそのものに、大きな違和感を抱いており、その理由は、どの本を読んだからといっても、合格するわけではないからなのです。

それでは、いったいどのようにすればいいのでしょうか。最も重要なことは圧倒的な読書、圧倒的な量の情報収集をすることです。

圧倒的な量の読書をするということは、つまり、「どの本を読めばいいか」という問いとは本質的にベクトルが違います。少量で、ピンポイントで小論文の対策をするという方向性と多読で圧倒的な量の本を読むという方向性の違いです。

ピンポイントで重要なポイントを学ぶというよりはむしろ、多くの本を読んでいく中で、リスク分散をして、その書籍の中のもっとも重要な概念や、考え方、コンセプトを学んでいくことが、重要なのです。

言い換えれば、「多読は、精読を陵駕する。」ということになるかもしれませんが。このように言うときすでに、精読の有効性を取り上げて、多読を否定したがる人がいるのですが、

多読と精読ではどちらが優れているのかというような、二元論はナンセンスです。

多読をする人は、必ず精読もします。ですから、どちらがいいのかという二元論ではなく、弁証法的に両方とも行うのが一番良いわけです。

どうということかというと、人より多く、読んで、読んで、読みまくって、その中でキラリと光る良書をあなたが見つけた時に、その良書を繰り返し精読することです。このようなことをする為には、そもそも情報処理能力は、高くなければなりません。

情報処理能力を高める手段として、場合によっては、速読を身につけたり、パラグラフリーディングを身につけたりする事が大変重要になってくる訳です。

私は精読か、速読かという二元論による読書論ではなく、「情報活用スキル」というコンセプトで読書論を情報活用スキルの一部として位置付けて考えることを推奨しています。

速読、暗記に役立てる速読、理解に特化した速読、精読、情報処理、ゼロベース思考、論理思考、問題発見能力、問題解決能力など、多面的に情報処理のプロセスを捉えなおすことを推奨しています。

速読を身に着けると、本を100冊読むといっても、たいそうな事ではありません。一冊にかける時間を少なくすることもできます。だいたい100冊程度読めば、ある程度リスクをヘッジ出来るのではないかと私は考えています。

出題意図と設問の要求

とくに慶應大学のSFCでよくある出題ですが、一見すると、とてもヘンテコな問題があります。場合によっては、経済学部でごく稀にこのような問題が出ることもあります。

このような時に、気をつけなければならないのは、「どのような出題意図でどのような事が設問の要求としてあるのか」ということです。

多くの人は、漠然とその設問の要求を受け取ってしまいます。なんとなく、その設問で問われているキーワードの周辺の事柄を述べるということをやってしまいがちです。なぜ

この様なことがいけないのでしょうか。

何がまずいのかについては、拙著「慶應小論文合格バイブル」にも書きましたが、このようなスタンスで書いた文章は、(設問の要求を満たしていない。)ととられるからです。もしも設問の要求を満たしていないととられてしまうと点数はありません。ですから、必ず、意識レベルを高くして、感度が高い状態で問題を見ましよう。

そして、自分の意識のレベルを高く保ち、「何をどこまで聞かれているのか」ということを細かく一つ一つの設問の要求について見極めるようにしなければなりません。

その為には、出題意図は何かを考えなければなりません。「いったい出題者はどういう意図があつてこの様な問題を作っているのか」ということをきちんと考えて、その上で、何をどのレベルで、どこまで書くことを求められているのかということを考えましよう。

なぜこの様な問題になっているのか、なぜこの様な問題の構成になっているのか、なぜこのような課題文なのか、なぜこのような聞き方なのか、というようなことを総合的にまづは考えて、何も考えずにただ聞かれたことに答えるだけにならないようにして下さい。

きちんと頭を働かせて、出題意図を見抜くようにしましょう。SFCを受験する人は、特にこの部分が大切です。ここがずれてしまうと合格出来なくなってしまうので、気をつけましょう。

出題意図

小論文の問題を解く時は、どの学部を受験する場合でも、第一に出題意図を考えましょう。もしも出題意図を考えずに、問題を解こうとすると、出題者が意図していた、期待していた答えと、まったく別の方向性をもった内容を書いてしまう可能性があります。

出題者が問題を作るときに課題文を選ぶわけですが、その課題文の主張に対して、出題者が共感していることもありますし、まったく共感していないこともあります。

出題者は課題文を自分で書いてはいいませんが、必ず設問を自分で書きます。

そのときに、なるべく、自分の感情や、課題文にもっている感情を盛り込まないように、気をつけて設問を作っていますが、設問の作られ方によっては、出題者が課題文に対してどのような感情をもっているか透けて見えるような事があります。

社会に対する怒りを課題文の筆者と同じように持っている場合、あるいは、社会に対する問題を課題文の筆者と同じようにもっている場合があります。

「その学部で出題されている」ということを考慮に入れて、その学部の趣旨や目的、それから、その課題文の内容、主張の程度、筆者の主張、設問の内容、そして、その設問で試そうとしている能力などを総合的に考えて、「いったいどのような目的と意図を持ってこの問題を作ったのか」ということを考えてください。

そうすれば出題者が書いてほしいことが分かりやすくなります。出題者が書いてほしい理想的な方向に書かれた答えは、当然ですが比較的点数が高いことが多いでしょう。

一方で、「出題者がまったく期待していないような出題者の考えに反する内容や答え」は

どうしても比較的点数が低くなってしまいがちです。

ここに気をつけて、「出題者はいったいどのような事を目的としているのか」という事になるべく感じるように心がけましょう。

大減点を防ぐ出題意図の見抜き方

出題意図はどうやれば見抜くことができるのでしょうか。大変重要な部分ですので、もう少しだけ詳しくお話します。出題意図を見抜くコツは、趣旨（本来何をその試験で見るのか、どういう学部なのか）と、「どういう能力を見たいのか」に注目することです。

出題者は必ず問題を設計する時に、見たい能力を先に考えます。そしてその能力を試す

為に、試験を用意します。ですから、その出題者が見たい能力以外の事をアピールしても、あまり良い答案にはなりません。多くの受験生がやってしまう間違いは全く求められていないことを沢山書いてしまうという間違いです。

出題者は、出題者側が求めていることを書いて欲しいと考えています。それに対して多くの受験生がやってしまう間違いは、今まで仕込んできたネタを披露することを重視するあまり、「ネタ中心の内容を書いてしまう」という間違いです。

出題者が何を望んでいるのかについては、私は毎年の過去問題の解説も通して、慶應クラスで解説もしていますが、これにはある程度練習が必要です。

実際に小論文を自分で書いてみて、細かく求められていることについての認識のギャップを埋めていきましよう。相手が何を求めているかを考えましよう。「出題者と受験者の間にあるギャップ」を埋めていくことも大切な小論文の練習です。

繰り返しになりますが、出題意図を読み取ることができずに全く求められていないことを書いた小論文は点数がほとんどありません。イメージとしては50点か50点以下だと

考えてください。それぐらいに出題意図は重要です。

要約はするべきか、しない方がいいのか

小論文の答案を作るときに、必ず課題文の要約を入れている人がいます。私は課題文の要約を入れる事はあまりお勧めしません。

基本的に小論文の試験は、設問で書くように求められていることを書くものです。ですから、求められていない要約をする必要はまったくありません。

よく大学の過去問題を収録した書籍には、課題文の要約が入っています。その為、多くの学生が設問で求められてもいないのに、(課題文の要約を書くべきだ)と認識しています

が、そもそもその大学の過去問題の解答例は完璧なものではありません。

過去問題の解答例は予備校の講師が書くものもあれば、出版社の担当者が作るものもあります。当然人間ですから、間違いもあります。

小論文は、数学のように、正解がある科目ではありませんので、小論文はあきらかに方向性が間違った解答例があることも珍しいことではありません。

もちろん課題文の要約は絶対にしてはいけないということではありません。設問で課題文の要約を求められている場合や、「課題文の内容をふまえた上で」という要求がある場合で、かつ、要約をしなければならぬような課題文が出題されていた場合は、この限りではありません。

どうしても課題文の内容を若干要約しなければ、自分の本論に悪い影響がありそうだと感じた場合は、課題文を少しだけ、短めで要約をしてもいいかもしれません。（私はお勧めしません。）課題文を要約すると、論述部分も少なくなりますので、自分が点数をアップするために、アピールする場所も少なくなります。そのようなデメリットも十分に認識し

ておかなければなりません。

実際に慶應大学出身の保護者の方から、問い合わせをもらったことがあります。娘が予備校で、小論文を指導してもらっているのですが、その指導内容や、娘が書いている小論文の答案がどうも間違っているような気がするということで、私の塾に電話をくださったのです。

その時の質問は、『〇〇社の過去問題の解答例は、課題文の内容を要約しているので、論述する部分がほとんどなくなり、小論文の答案にもかかわらず、ほとんど自分の意見を述べずに、課題文の要約だけで答案が埋まってしまっているので、これはおかしいのではないのでしょうか。』という問い合わせでした。

もちろん、文字数が少ないのに、課題文の要約をする必要はまったくありませんし、そのようなケースでは、与えられた文字数を有効に使う為にも、筆者の主張は要約をするのではなく、問題設定で、筆者の主張をふまえた形で、問題設定をするなどして、対応する必要があります。

特に文学部、法学部を受ける受験生は、課題文を要約しなければならないと思います。いる人が多いので、この点に特に注意してください。

評価基準

皆さんが小論文を書く時に特に注意してほしいことがあります。

それは、評価基準です。

法学部は、評価基準をキチンと問題に書いていますが、それ以外の学部では、あまり公開していません。

それならば、「評価基準を公開していないのであるからして、小論文は、どういう風に書いていてもいいのである！」と、思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、その

ようなことはありません。

基本的には、構成力、内容力、表現力、発想力の4点で小論文は評価されています。(例外はたくさんあると考えられます。)大学が求めている評価基準で内容を書いていたとしても、このような基本的な力がまったく無い場合は、合格点をとることはできません。

なぜならば、あくまでも小論文試験は競争試験であって、「相対的に優秀か優秀ではないかを判断する試験」だからです。

従って、自分が他の人より著しく劣っている場合は、どうしても他の優れている人から順番に受かるようになります。構成力、内容力、表現力、発想力という4点については、がっちり実力を高めておく必要があります。

厳密には、構成、内容、表現、発想を決定づける、思考力や問題解決力、問題発見能力、プレゼンテーション能力、知見の量などを改善していかなければなりません。

ここまでにご紹介した「基本的な原則」はおさえておく必要はありますが、かなり変わった問題が出題された時は、どのような評価基準なのかを疑ってみる必要があります。

みなさんは、学部ごとに、どのような小論文の答案が受けるかについてあまり具体的にイメージがないかもしれません。

法学部には、法学部らしい小論文の答案があります。文学部には文学部らしい小論文の答案があります。また、総合政策学部には総合政策部らしい答案があります。環境情報学部には環境情報学部らしい合格の答案があります。「慶應大学小論文合格バイブル」には、それぞれの学部が重視する価値観というものを記載しました。

第一に、何がその「小論文の評価を決める根本的な理由」になっているかといえ、それは、その学部が重視する価値観です。従って、「その学部が重視する価値観とは何か」を十分に頭に入れた上で、その学部特有の理想的な答案を作ることを心がける必要があります。

一番分かりやすい例は、環境情報学部かもしれません。小論文試験は、基本的には、論証する試験です。これは、法学部や、総合政策学部、文学部で顕著です。しかし、小論文

の試験は、ただ単に論証するだけが目的ではありません。環境情報学部では、プレゼンテーションの力を見られることも珍しくありません。

小論文試験の本来の趣旨は、優秀な生徒を選抜することであり、学部ごとに優秀さの基準は違います。ですから、環境情報学部のような学部では、論証する力ではなく、新しいものを創造する力や、知恵がはたらく人を選抜して採りたいと考えているのかもしれない。

ここでご紹介した環境情報学部の例では、いかにして文章で論証できているかということよりも、自分の考えたことを、いかにして相手に伝えてその読み手の心を動かすことができるのかということに、評価基準がある場合もあります。現実の世界で通用することを考えることができるかどうかを見られることもあるでしょう。

「慶應小論文合格バイブル」や「慶應クラス」のウェブサイトでは、解答例を掲載していますが、その際にはそれぞれの学部の特性を若干意識した解答例になっています。

このように学部ごとに文章の雰囲気や、スタンスを変えるように心がけましょう。学部ごとに大変微妙ではありますが、特定の価値観に基づいた評価基準がありますので、すべての学部に対して、同じような文体、スタンス、価値観、雰囲気で答案を書く、アピールの方向性が間違ったものになります。法学部を志望している場合に、まったく求められていないのに、解決策を提案するようなことをしても、評価にはあまりつながりません。何を求められているのかは、その学部の趣旨や価値観も含めて考察する事で、分かりやすくなります。

ぜひこの点に気をつけて小論文を構成するように心がけてください。

何の話？

小論文の答案でよくあるミスに、文章をしっかりと構成できていないというミスがあります。

す。いろいろなことを、書きたいので、接続詞を安易に使っていろいろな話をして、話がぶれてしまっているというミスです。書き手はあまり気にしていないことが珍しくありません。しかし、読み手からすれば、そこに書いてあることは、もちろん初めて読むものです。書いている方は気持ちよく文章を書いていますし、自分が書いている文章は論理的に筋が通っていると思っっていますし、多くの場合、誰もその文章に反論しないと考えています。ところが読み手はまったくそのように感じていないことが珍しくないのです。

小論文の答案を書くときは、あくまでも論文としてがっちり、そして、きっちり正確に記述することが大変重要です。今ここで私が書いている文章とは全く趣旨が違うわけです。私が小論文の解答例を書く時も同様です。趣旨が違う文章を違う書き方で書きます。

小論文として、成立した文章を書く為には、一方で、○○というように述べて、ところが、●●●●というように、また別の話を書き、というのも△△△△というように、話が二転三転しないようにしましょう。軽い気持ちで接続詞を使うと、話がまとまりません。また・・・とか、そして・・・という言葉を多用してはいけません。

原則として、小論文では、「従って」「しかし」などの論理接続詞を使います。これが「縦の論理」を示す接続詞です。「横の論理関係」は、第一に、第二に・・・などのナンバリングする言葉を使いましょう。

よく本や、メルマガジンの文章と小論文の文章を混同している人がいますが、基本的にまったく違う趣旨であり、まったく違う性質の文章ですので、同じ文章であるとは考えないようにしましょう。

私が、本やメールマガジンで使っている言葉を小論文の答案で書くことはありませんし、私が小論文の答案で書くような言葉を、本やメールマガジンで書くようなことは当然ではありません。

本には本の目的があり、メルマガとは目的が違います。趣旨も違います。

何の話？パート2

小論文のスタンスとして、自分の主張を書かないようなスタンスを大切にしている人もいます。このようなスタンスの文章（主張を全く書かないような文章）は、「慶應小論文合格バイブル」にも書きましたが、基本的には、点数は低くなる書き方です。

採点者側はこれと同じく、（何の話？）となります。つまりは、自分とは無関係の世界のことを、自分の考えとは半分無関係のような形で書いているので、ただの世間の説明文のようになっていくということです。

あるいは、ただ単に、読者に何かを呼びかけているだけの文章になってしまっているということなんです。ですから（何の話？）と思われる方も仕方ありません。主張が無い文書等はこのような理解されにくい文章になってしまいがちです。

あくまでも、『あなたは自分の頭でどのようにこの問題を考えるのか』ということを小論文試験では問われていますので、他人がどう思うかではなくて、自分がどう考えるのかを書く必要があります。当然ですが、文章を無責任な他人事のように書いてはいけません。

もちろん、自分の主観100%で、感情的になって感情論のような文章になっているの

は論外ですが、その逆に、自分の主観が1%も入っていないような文章は、小論文試験の答案ではありませんので、このような主張が全く入っていないような文章は絶対に書かないように気をつけましょう。

情報の当たりづけ

慶應SFCを受験する人は、もしかすると試験本番で大量の資料を与えられるかもしれません。

試験で大量の資料が与えられた時に、頭がパニックになって（こんな膨大な資料を試験会場で読みきるといような事は出来るわけがない）と持っている方もいらっしゃるかもしれません。そこで大切になってくるのが、情報のあたりづけです。

情報のあたりづけというのは、そもそも無限に存在するこの世の中の情報の中の何が今

回の問題を考察するにあたってもつとも重要なのか、ということの判断です。

従って、情報のあたり付けがうまくない人は、「手当たりしだい情報を集めてきて、細かく情報を分析してその結果見事に結論を間違える」あるいは、「考察が駄目なる」ということになります。

慶應SFCの問題では、単にすばやく読むことが出来るかどうかだけを試しているのではなく、複雑な問題を考察するにあたって、どのような事に注目するべきなのか、その点について、情報のあたり付けがうまい人、より適切に思考することが出来る人を選ぶことが、大量に文章を与えるひとつの理由になっています。

難しい文章を与えて、その文章を読解することが出来るかどうかを試しても、確かにその人の思考力を幾らか見ることが出来ますが、国語の力を重点的に試されることになるので、思考力が高いかどうかということを試すことが出来るかというところ少し疑問があります。思考力というのは、単に文章を読解することが出来るかどうかという点だけではありません。今のようにインターネットのインフラが完全に整理された社会では、多くの情報の中

から「どのような情報が適切なのか」を正確に見抜き、情報に意味づけを与えることができるかどうかという点も重要な思考力となっています。

私に通っている大学院でも、情報のあたり付けが上手な人と、苦手な人がいます。情報のあたり付けが苦手な人は、そのケースを考察するにあたって、あまり関係のない情報を集めてしまうなど、たくさん情報を集めてきれいにまとめても、考察の段階で間違ってしまうミスを犯してしまいます。

つまり人間というのは、たくさん情報があればあるほど、より適切な考察が出来るとは限らないのです。現実には情報が増えれば増えるだけ判断を加えることが難しくなってきます。その理由は、情報は単発で存在しているのではなく、現実の社会ではほぼ無限に存在しているので情報に適切に意味づけを与えることが不可欠だからです。ここでご紹介した情報に対する意味づけというのは、大変高度な思考の技術を要します。

まず雑多に存在している情報をどのように求めるのかということが極めて重要です。情報をまとめる際に、**間違った情報のまとめ方をすると、間違った解釈が導かれます。**

例えばここに100個のデータがあったとします。この100個のデータをどのように分けてどのようにグルーピング化し、そこからどのような解釈を得ることが適切なのでしょうか。

ケースバイケースで自分の頭を使い、考える必要があります。ほとんどの小論文試験ではこのように情報をグルーピング化するなど、雑多に存在する情報を整理するようなことまでは求められません。

しかし慶應大学のSFCでは、このような作業も場合によっては出題範囲となります。大量に情報が与えられた場合、どの情報が最も重要でどの情報が重要ではないのかということも考えなければなりません。

当然適当に考えるのではなくてきちんとした理由があつて何が重要で何が重要ではないのかを判断しなくてははいけません。

なんらかの問題を考える時は、その問題の結果に影響を与える因子はどのようなものがあり、どのような因子が、最終的な結果にもっとも大きな影響を与える因子なのか、とい

う事を考える必要があります。

例えば「慶應小論文合格バイブル」では、慶應大学の小論文試験で合格点をとるということを目的として、その結果に対して、背景要因と内部要因と外部要因の3つの点から、考察を加えていました。しかし、多くの人は、外部要因だけを気にします。

慶應大学の小論文試験であれば、多くの人は、各学部の出題傾向や、出題内容がどのようなものか、ということばかり気にします。ここが分りさえすれば、問題が解決すると思っ
ているのです。しかし、そのような外部要因だけから対策を考える事は有効ではありません。
せん。

本にも書きましたが、メジャーリーガーのイチロー選手が皆さんにどんなにメジャーリーグ対策のことを適切にアドバイスしても、皆さんはメジャーリーグで活躍できるわけ
はありません。

小論文試験も同じです。まず背景要因として、小論文試験とはどういうものなのかをき
つちり分かかっていなければなりません。

また慶應大学の小論文試験特有の性質には以下のようなものがあります。

- ① 内容が特殊
- ② 問題がハイレベル
- ③ 受験生の母集団のレベルが高い

単に外部要因（試験の出題形式がどうかなど）だけではなく、このような試験にどうすれば合格する事ができるのかを考える必要があります。

このようなハイレベルな試験で、「小論文試験をどのように定義すべきか」ということや、どのようなことに気をつけなければならないのか、評価基準はより具体的にいうとどのようなものなのか、それを踏まえて「どのように書くべきなのか」等もきちんと考察する必要があります。

雑多に存在している「合格の為に必要な諸要因」がきちんと分からなければ、「慶應小論文合格バイブル」という書籍の内容はあまり魅力的なものとして映らないかもしれません。単に出題形式や分野だけではなく、雑多に存在する合格の為に重要なポイントに気づかない人は情報のあたり付けが苦手な人です。世の中に存在する様々な問題を解決するには、常にその問題を構成している構成要因がどのようなものなのかを思考の優先順位として先にくる必要があります。

例えば受験勉強を何年やっても浪人してしまう人がよくやってしまう思考なのですが、どのような参考書を使えばいいのか、何をいつやるのか、どの予備校がいいのか、どのような勉強のやり方がいいのか、ということに気にかけていることがよくあります。

しかしそのような人を細かく観察していると、圧倒的に勉強時間が少ないことが多いのです。

つまりその人は、思考の優先順位として参考書や、「何をいつするのか」や、予備校の選

択などが先にありますが、そもそも試験に合格するためには何が必要なのかという問いかけや、『自分の勉強時間が短いからこそ合格できていないという本質的な問題点』への情報のあたり付けが出来ていなかったということです。

自分自身に投げかける問いを甘く見えてはいけません。良質な問いは良質な答えを導きます。曖昧に問えば、曖昧な答えが返ってきます

自分自身に発する問いのレベルが高い人は、問題を解決する力も高く、目の前の問題に対して、多くの場合対処する事ができます。

このように情報のあたり付けがうまく出来ていないと決して問題を解決することはできません。

その為、「慶應小論文合格バイブル」には、背景要因として、難関大学あるいは、難関大学大学院を受ける人が、小論文試験をどのように考えるべきなのか、小論文試験とはそもそも何か、どのような評価基準で具体的にはどのようなようになっていくのか、ということを詳しく書いたわけです。

このようなことをふまえて、試験本番で小論文を解く際も情報のあたり付けを大切にしてください。そして膨大な資料が与えられたら基本的にまずやっていたきたいことは、その膨大な資料の構成を知ることです。

情報のあたり付けはどのように行えばより効果的にできるのでしょうか。一つの大きなコツは、大きなところから順番に見ていくことです。情報のあたり付けがうまくない人は、往々としてまず細かい問題からあたっていきます。

例えば勉強をして成績を引き上げるということに関していえば、どの予備校のどの講座がいいのかということや、どの参考書のどの部分がいいのかということに気を配ってしまいますが、これは先ほどもお話ししました。とても細かい部分です。

そうではなく、もつとも重要なことは、**まず大きなことから見ていく**ということです。

つまり試験に合格するには何が必要なかという問いをたてて、それが記憶量であるとかかった時に、「いったいどのようにすれば記憶量を増やすことができるのか」というように、大きなところから少しずつ細かいところにおいていくように、思考を組み立てていく必要

があります。

小論文の試験の資料にこれを当てはめてみましょう。まず提供された資料は、どのくらいの数があり、どのような種類のものか、その概要はどのようなものかということが分かるなければなりません。

まず、資料のひとつひとつの細かい数字などを追っていくのではなく、資料のタイトルだけを見ていきましょう。資料のタイトルを全部見終わった後に、これらのタイトルを総合的に考えて、いったいどのような目的があつて、出題者はこの資料を出したのか、そしてこれら多数の資料の中で、「一貫するテーマ」とは何か、こういうことを考える必要があります。

その上で、その小論文が問われた設問要求を細かく見つけてその問いに答えるにあつて、フレームワークで考えてもつとも重要なメインのポイントはいったいどのようなものか、ということを考える必要があります。

つまり問題解決にあたって、もっとも結果に大きな影響を与えているものは何なのかと

いうことを考えるわけです。

このように考察することによって情報のあたり付けをより効果的に行うことが出来ます。ぜひ過去問で試してみてください。

思考力は情報のあたり付けの精度で、決定される

目の前の問題を「どう捉えて、どう見るのか」という部分で、その人の思考力が決まると言っても過言ではありません。

情報のあたり付けについて、軽く復習しておきます。

情報のあたり付けとは、言い換えれば、判断の為の重要な基準の中で何が重要なポイントになるのかについての、判断基準を得ることです。

私たちは情報を集めても、必ず問題点を発見できるわけではありません。表層面に表れ

た問題はほぼ無限に存在します。それらの問題点の中で何が重要なのかということや、世の中に雑多に存在する情報の中から、「どの情報を判断の際に重視するのか」ということについての判断ができなければ、実質的に、問題を考察する際に、何を重視するのかという事が変わってくるわけですから、重要判断基準も変わってきます。

たとえば、経営学では複雑な世界の問題を解決することの連続ですから、この情報のあたり付については様々な理論があります。例えばハーバード大学で提唱された、SWOT分析と呼ばれるものや、3Cと呼ばれる分析方法などです。これらの様々な情報のくくり方の事をフレームワークと言います。このフレームワークは、あくまでも理論にすぎません。理論が100%実態を反映しているわけではありませんし、100%現実に適応できるわけでもありません。勉強を好む人が頭でっかちになってしまい、フレームワークイコール物事の答えとして認識してしまいがちですが、これは思考の大きな落とし穴です。

これらのフレームワークで情報をくくるということは、情報をこのフレームワークで加

工するという事です。情報分析の方法は様々な方法があり、最も信頼がおける情報分析の方法論というのは、それぞれの情報を例えばフレームワークなどでグルーピング化し、その情報群の内容を帰納法的にまとめあげるといふものです。

たとえば、小論文の本でも分かりやすい例として解説しましたが、坂本君という男の子がもてるのか、もてないのかということを考察する際には、その坂本君に関する情報を内面と外見と、背景要因で分析して、情報をくくり、どのようなことが言えるのか・・・ということをやりました。外見に関しては、服のセンスがいい、髪型もかっこいい、顔もモデルのような顔立ちで、背が高いという情報がまとめられていくと、外見に関して多面的に考察した場合におそらく坂本君はもてる外見なのではないかという推論が働き始めます。このように情報をグルーピング化する事で、その情報群に対してどのような意味づけを行うべきなのかという事が、一つには極めて教科書的で、間違いの少ない情報分析方法なのです。

ところがこのような分析方法には注意点があります。その注意点とは、情報をフレーム

ワークでくくった場合には、そのフレームワークが適切かどうか、今回のケースにおいて有効かどうか先に判断されなければならないということです。

分かりやすい卑近な例を挙げましょう。たとえば、前提が違った場合は、話が変わってきます。東京芸術大学の女学生で、文学少女の女の子がいたとします。この子の名前は、文子（ふみこ）さんだったとします。この子が、大変特殊な子で、とにかく文学を愛しており、文学的才能がある人こそが真に素晴らしい男性で、魅力的であるという考えの持ち主だったとします。価値観が個性的なタイプだった場合は、外部要因と内部要因と、背景要因のフレームワークでくくるといふことの意味自体が極めて薄いということなのです。

フレームワークを習った人は、そのフレームワークを金科玉条としがちですが、これは間違った思考のプローチです。目の前の問題を自分の目で見ても、自分の頭で考えると、私が「慶應小論文合格バイブル」に書いた理由はここにあります。

情報の意味づけを与える前に、その情報群のくくり方やそのくくり方の妥当性が先にチェックされなければ客観的な情報分析には何の意味も無いのです。「思考の精度は情報のあ

たり付の精度によって決まる」と私が述べる理由はこのようなところにあります。

フレームワークでくくり、その最終的な帰納法的な論理の帰結が必ず本質的な問題点として浮かび上がるといふ事はありません。ここに述べた通りです。そして、どのようなフレームワークを用いて考察しても、同じような種類のデータが抽出されるということもありません。なぜならば、フレームワークのテーマに情報は加工されて情報がねじ曲がっていくからです。

どんなに私たちが客観的に中立の立場から科学的に高い国語力で文章を抽出しようとも、その際に国語力が優れていれば優れているほど、情報はそのフレームワークの言葉に集約されていき、情報はそぎ落とされ、情報は選択されます。情報が選択されるということは、**情報が捨てられていくという事です。**

情報を帰納法的にまとめあげると、要するにどういう事が言えるのかという事を考える際には、そのフレームワークの内容に情報が加工されるということを強く覚えておきましょう。

よう。

今回の坂本君の例で言えば、坂本君は文子さんにもてるでしょうか。

この点を考察する際には、まずどのような情報に対するあたり付が必要でしょうか。

坂本君が文学を好きかどうか、坂本君が文学を愛しているか、坂本君が文学作品を書くことができるかどうか、このあたりの文学に対する愛情、文学的素養、文学的才能などの3つのフレームワークで情報を集めてくることが、重要になるかもしれません。

その上で、これらの情報を重要判断基準として考察する事で、坂本さんが文子さんにもてるかどうかを多面的に評価する事が、必要になるでしょう。

小論文の解き方や考察方法については、「方法」を知りたがる人がいます。大事なことは方法ではなく、「原理原則」です。どのように頭を働かせれば、どのような作用があるのか、人の判断ミスはどのような時に起こるのか、より妥当な結論に至る思考ステップとはどのようなものか、このような原理原則をきちんと学び、自分の考察に活かさなければなりません。

せん。「方法」に頼る人は何も考えられなくなってしまいます。

理論は理論にすぎない

何かを学ぶと私たちは、理論を絶対化しはじめます。間違えてはならないのは、理論は絶対ではないということです。ハーバードが発表したSWOT分析も理論に過ぎませんし、このようにフレームワークで物事をくくることがすら理論です。また情報は帰納法的にくくっていけば、情報の読み取り精度が高くなるということもまた理論です。繰り返しとなりますが、間違つてはならないのは、理論は絶対ではないということです。蓋然性が高いものであるだけで、ケースごとに当てはまらないことも当然あります。

従つて柔軟に頭を働かせて、最後は自分の頭で柔軟に頭が固くならないように、考えなければなりません。それだけは絶対です。自分の頭で考えることを放棄しない、最後は教

科書的な考えを持たないということが、最も重要です。

頭の中で、原則と例外、理論と、原理を分けて考えて考えましょう。それらが分かった上で思考スキルを磨くというスタンスを大切にすることが大切です。

丸暗記で覚えたものを仕込むなど論外です。自分の頭で考えて、先入観を無くし、ゼロベースで物事を考え、様々な思考スキルを駆使して、高いレベルで高い精度で、考える事ができるようにしましょう。

思考に絶対は無いのです。

下書きの重要性

みなさんは、小論文の問題を解くときに下書きを書いているでしょうか。もしもあまり

書いていない人がいれば、ぜひ下書きをキチンと書くようにしてみてください。小論文の下書きはいうまでもなく重要です。

「小論文の答案の論理関係が破綻している」、「話がいろんな方向へいく」、「全体を通して何を言いたいのかわからない」というような人は、たいていキチンと下書きが構成されていません。下書きも無く、ぶっつけ本番で、文章を書きはじめてその文章が論理的にすばらしくきちんと組まれている文章を書くことが出来る人というのはあまりいません。文豪のドフトエフスキーはこの手の天才だったそうです。

もちろん問意理結という型にはめて書いていけば、比較的簡単にぶっつけ本番で書くことは出来ますが、それでも、下書きはあるにこしたことはありません。

(問意理結は、ここでは型と便宜的に解説していますが、厳密には型ではなく、論文の原則に近いものです。)

特に重要なのは、問題設定、意見提示、理由、結論の中の、理由の部分です。つまり、展開の部分です。ここで、自分はどうのように主張(仮説)を論証していくのか、その論理

関係を少しだけ細かく書いておくことが大切です

その理由は、理由部分というのは、複雑になることが多い為です。展開部分の理由の部分を整理してきちんと書くことができている文章は、構成力も高く評価されます。

また、「時間内に解くことが出来ません」という人や、「何も思いつきません。」という人も同じく下書きを書いていないことがあります。

まず何もない白紙の状態からアイデアや知恵を働かせるというのではなく、手を動かして文章や図を書き、その図を見ながら考えるようにしてみましよう。今まで以上に簡単に書き進めることができます。

このようにすると、下書き用紙にいろいろと書くまでは、思いつかなかったアイデアや知見に到達することがあります。パツと新しいことを思いつくわけです。下書きをきちんと書いて、高いレベルの発想力や構成力を手に入れてください。

問題設定のやり方

私は、小論文の答案で、問題設定をすることを、どちらかというとお勧めしています。理由は「慶應小論文合格バイブル」に書きました。

それでは、問題設定はどのようにやればいいのでしょうか。基本的に問題設定は、オウム返しでやります。ということかという、例えば2010年度の文学部の問題では、

水村氏の現状認識をふまえた上で、英語を日本の公用語とするという意見について、自分の意見を340字以上440字以内で述べよ。

という問題が出題されていますが、この場合は、

英語を日本の公用語とすべきだろうか。

と問題設定すればいいわけです。

もちろん、いくらか文章を付け加えることはまったく問題がありませんし、文章が不自然にならないように、何らかのフレーズや、文章を加えた方がいいでしょう。

注意点を書いておきます。

問題設定をやるときは、必ずオウム返しをすればいいというわけではありません。オウム返しの問題設定をして不自然な文章になってしまうこともありますので、そのような場合は、当然ですが、オウム返しで問題設定するべきではありません。例えば2007年の慶應大学法学部の問題は、課題文を読んだ上で、法と政治と歴史の三者の関係を500文字程度で要約し、それと関連づけながら、あなた自身の考えを述べなさいというものです。

この場合は、課題文の中の筆者の主張部分（最重要論点）に対して自分の考えを述べる
ことが求められています。そして、その筆者の主張は、明確に規定することはできませんが、
課題文の中では、明確に規定されているわけではなく、いろいろな文章の中で、多面的に
主張することで筆者の考えが描かれているという形になっています。

課題文の最後の部分に、

国際政治もとりあえず一国ずつ歴史主義を捨て、法の精神にのっとり行動する政府が増
えていけば、ここで用いた比喻が比喻でなくなる日が来るのも夢ではあるまい。

このようにありますが、この文章をオウム返しで書いてもあまりいいことにはならない可
能性があります。どの方向に自分が論述していくかによりますが、本書では、受験対策本
として書くことが不適切な部分もありますので、この点については、あまり言及しないよ

うにしておきます。(電話やスカイプのサポートでは詳しく話をしたこともあります。)

〈問題設定の方法〉

基本的に問題設定をする場合、考察するポイントは、3つです。

1つ目は課題文の内容です。2つ目は出題者の意図です。3つ目がもとも重要ですが、設問の要求です。

これらを総合的に考えて、どのように問題設定をするべきなのか、ということを考えて、ケースバイケースで対応するようにしましょう。場合によっては、問題設定が無い文章の方が引き締まる場合や、文章が回りくどくなくなる場合があります。このような可能性も考えて問題設定の内容を考えます。

課題文の内容を総合的に考えて、何が重要な論点なのかということを考えましょう。ま

るで重要ではない論点について問題設定をしても、トンチンカンなことを述べてしまします。

また、課題文の内容をしっかりと把握していれば、設問で聞かれていることの意味や趣旨を考えやすくなります。

提案型の小論文

私が拙著「小論文技術習得講義」に、小論文は提案型と主張型の問題があると書いたので、小論文の答案に、自分の提案内容を細かく入れ込む人が時々います。基本的にはこのような事はなるべくやらないようにすることが重要です。

〇〇はどのようにすべきだと考えますか。あなたの意見を自由に述べてください。

という類いの問題に、問題解決の力を見られていると思って、提案型ですぐに書いてしまう人も時々います。(※提案型というのは、自分が提案する内容を書くタイプの答案の事です。)

その時は、よくよく考えて、この問題では問題の解決を求めているのか、それとも、社会問題に対してどのようにすべきか、自分の主張をどのように論じて、展開していくのか、その力を見られているのか、どちらなのかということ判断することが大切です。

途中まで主張型で書いていたのに、急に提案型で書きはじめ、自分の提案を盛り込んでいく、かなり変則的な書き方をされている人もいますが、基本的にはこういう書き方はない方がよいです。

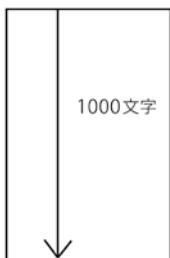
特別設問でそのようなこと(主張+提案)が求められている場合は、主張した後、提案するということをしてもらったらいいのですが、特に設問でそのようなことは求められ

ていないにもかかわらず、何かを主張して、どんどん提案していくようなことをすると、大幅な減点をされる可能性があります。

小論文を主張型で書くか、提案型で書くか、見極めるポイントの中で大きな判断基準は、出題者が何を求めているかです。問題解決の能力を求めているのか、何かを主張するとき、きちんと主張できる力を求めているのか、どちらなのかを考えて主張型なのか、提案型なのかを判断するようになければなりません。

○ OK

主張型



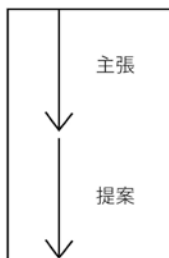
○ OK

提案型

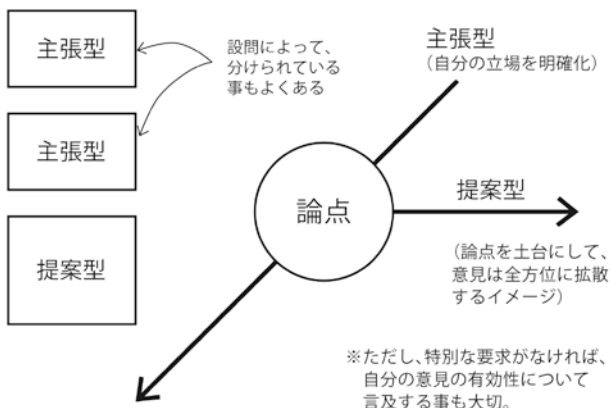


× ダメ

主張した後に提案などは、あまりやらない方がよい



※設問に、この様を書く事について、指示があれば混ぜてもよい



評論家の文章ってどういう事？

小論文の答案で、最も多い失点は、自分の意見を書きまくる失敗です。その書かれている内容が、評論家のようになってしまうことによる失点です。

評論家の文章とはどういう文章かというと、自分の意見をつらつら書いた文章で、ちよつとだけ露骨にいうと、『高みの評論』としての一般論を書いているようなイメージの文章のことです。

大学を見おろして高いところから、自分の意見を述べるというイメージの文章です。その逆に、「自分の文章は、論文として成立するようなものを書きましたので、ぜひ見てください」というのが、理想的な小論文の答案です。（少し大げさな表現かもしれませんが、あえてイメージしやすいように、大げさに表現しておきました。）

言い換えると、仮説の提言です。

では、これは卑屈なのかというと、決して卑屈なのではなくて、基本的に論文というものは、自分の考察レベルが高い事を披露・アピールするものではありません。

多くの場合は、しかるべき機関に提出して、その論文を見てもらい、論文として大きく評価されれば有名な雑誌に掲載され、それが、世界中の人によりキチンとした形で伝わるという、イメージ的に言えばそういう性質のものです。

従って、書かれている内容は、原則として事実ベースであることが理想です。その事実に対して自分がどのような解釈を加えているのかという事も客観的に書かれている必要があります。

一方で、主観的すぎる文章が、評論家の文章といえるかもしれませんが。客観的な文章が理想的な小論文の答案ということになります。

ではどのようにすれば、もっと客観性が高い文章を書くことができるのでしょうか。基本的には、「事実をグルーピングする」と覚えておきましょう。事実をグルーピングする

ことによって、客観性が増します。グルーピング化する際に事実が少ないと、グルーピング化したくてもできません。その意味で、ある程度多面的にデータを書き、理由も複数の視点から書かれているのが理想的な答案の方向性ということになります。（主張型の場合）もちろん、単にグルーピング化するだけでは意味がありませんが、「いくつかの事実の塊からどのようなことが高い可能性で考えられるのか」がしっかり考察されていれば、その考察（仮説）は高い精度で、真実に近いと言えます。

つまり事実をたくさん集めたものは、そこに解釈を加えるにしても、事実が1つしかないものに解釈を加える場合に比べて、より妥当性が高いということです。

1つの事実から何かを解釈しようとする、客観性や妥当性は低いのですが、より多くの事実から、解釈を加え、それが、論理的に妥当なものであれば、客観性の高いものになるということです。

自分の書く答案を整理して、できれば、事実はグルーピングしましょう。自分の意見が、単なる憶測や、独りよがりな内容ではないということをきちんと伝えることが大切です。

抜書きをやめよう

SFCの小論文ではたくさん課題文が出題されることもめずらしくありません。そのような時にそれぞれの課題文について抜書きをする人がいますが、これはなるべくやらないようにしましょう。

なぜこのような事をしてしまうのでしょうか。おそらく過去問題の解答例で次のようなことが行われている為です。

抜書きとはどういうものかという点、資料Aで〇〇について述べている。資料Bでは〇〇について述べている。資料Cは〇〇について述べている。というような文章のことです。

なぜ過去問題の解答例でこのような事が書かれるのでしょうか。誰にも「間違いではな

いか。」と言われにくいからです。しかし、このような抜き書きは原則として間違いだと認識しなければなりません。

重要な事をお話します。最初から抜き書きをするようなことは大学側から求められていません。要約問題は別です。要約問題ではない場合は求められてはいないということです。

その抜き書きが自分の展開する本論に極めて大きな意味があり、その抜き書きが無いとどうにもならないという場合は、抜き書きのようなことをやってもいいのですが、その様に抜き書きをしないとどうにもならないということは基本的にはほとんどありません。また本文に書いてあることについて、読解力を試されないような問題で、抜き書きをして答案に書くのは、ほとんど自殺行為に近いと思っていいていいでしょう。

なぜならば、まったく求められていないことをしてしまっているからです。

課題文に書いてあることは、採点者は試験本番では熟知していますから、その内容をわざわざ貴重な答案のスペースを使って、ただただ書いているということ（抜き書きばかり

をしているということ)は、「分かりきっているなんの解釈でもない文章」を、採点者は読まされているということです。

このような事に大変大きな怒りを覚える採点者の中にはいますので、どちらかといえば、やはり抜き書きはやらない方がいいということになります。(要約問題以外で)抜き書きをすることで合格するのであれば、誰も苦労はしません。要約をするには読解力が必要ですが、抜き書きには必要ありません。文字数をいたずらに消費しないように気を付けることが重要です。

分析力について

SFCの小論文試験では、問題解決能力が主に見られています。問題解決をする時には、分析が重要な意味を持ちます。その為、「SFCの小論文試験は分析することが大切だ」と

いう小論文指導が比較的横行しているようです。

これに対して私の意見は、分析は確かに重要だけれども、分析が求められているのではないというものです。（正確に言えば、分析だけが求められているわけではない。）

よくある間違いは、分析力が求められているので、答案で分析力をアピールすると点数が高いという勘違いです。それは問題によりません。

分析というのは、問題解決の1つの手段でしかありませんから、分析力が高いからといって、問題解決力が高いとは限りません。分析がいくら出来ても、その後の思考がうまく出来なければ、導かれる結論は必ず間違ったものになります。

↳分析の方法

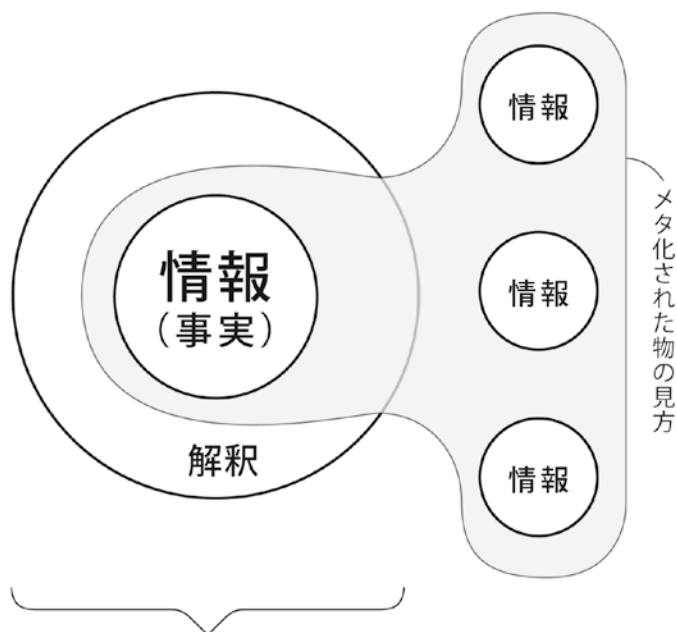
本来分析というのは、情報に意味づけを与えることです。目の前に存在している情報群に「どのような意味づけを与えて、データを解釈するのか」という部分が正確にできて、初めて分析としての価値があります。単にデータを抜き出しただけでは、何の価値もあり

ません。また、こじつけの持論を、データを元に展開することにも意味がありません。抜き出す前のデータ群の関係性や構造、重要度の比重を見抜かなければなりません。

慶應大学の総合政策学部では、「介護労働者の離職率に関する出題」がある年にありました。なぜ介護労働者の離職率が高いのかについて、考察する問題です。そして対策について、妥当性が高い考え方ができるかどうかを試す問題でした。

このような問題を解く際には単にデータを抜き出しても意味がありません。そのデータ群の中で、重要度の比重が高いものを見極め、また論理的に重複しているデータの整理（同じカテゴリに入れる事ができるものは同じカテゴリに入れて、まとめる）をする必要があります。こういうものを総合的に見て、重要度が高いデータをまとめたものから、「どのようなことが言えるのか」という事を考える必要があります。つまり単発のデータではなく、データの集積から考察するということです。出題された資料群は、すでにまとめられた資料ですが、まだまとめられていないデータだということです。

情報の読み方



ニュースで流れるのは、解釈も含めた情報。
この情報をうのみにすると判断を誤る。



複数の情報源を使う

このような作業を通して、表層面の問題点ではなく、「物事の本質的な問題点」が浮かび上がってきます。最終的に「介護労働者の離職率が高い」という結果に大きな影響を与えている重要因子を特定しやすくなるということです。このような情報をまとめる作業はいろいろな切り口から可能です。どの観点で情報をまとめるのかということがすなわち、最終的な結論を変えます。ですからよくよく考えて情報を臨機応変にまとめなければなりません。

ここでご紹介した情報のまとめ方は、総合政策学部だけではなく、法学部でも有効な事があります。また環境情報学部でも有効なことがあります。

法学部の場合は、雑多に存在するデータが文章の形で与えられることが多く、その雑多な情報をどのように解釈して、持論を展開するのかということが求められます。この場合は、雑多に存在する情報を、カテゴリごとにグループ핑グ化してまとめ、問題の構造を図式化して、下書き用紙に書いて、分析を加えれば考察をやりやすくなります。

「分析だけが重要なわけではない」

分析ももちろん重要ですが、思考することは言うまでも無くもっと重要です。きちんと思考した内容を答案に反映させる力も分析と同じか、それ以上に重要です。

「分析が重要であるからして、分析した内容を盛り込めばそれだけ評価されるのである。」という風には決して考えないようにしてください。

重要なことは、慶應大学はSFCに関して言えば、問題解決能力を大変重視しているという事です。重要なことは、その先です。

小論文の問題によっては、分析の力だけを求めているものもあるでしょう。その場合は、分析力をアピールしましょう。

しかし、そうではない別のものが求められている場合は、その年の問題で最も求められているものは何かを考えて、文章を組み立てる必要があります。相手が求めていることをアピールしても相手には魅力的には映りません。

少しわかりやすいかもしれませんので、若干不適切なことを承知で、例を挙げます。

たとえば、清楚な女性が好きな男の子がいて、その男の子に対して、俗にいう、ギャルメイクをして、ギャルのような髪型で、派手な服をきて、派手なネイルをして、派手な靴を履いて、きつい匂いの香水をして、長すぎるつけまつげをつけ、その男の子に近づいたとします。そんなことをしてもその男の子には、嫌われてしまいます。

そのように露骨にいわゆるギャルとしての姿になっている場合は、世間一般ではかわいいかもかもしれませんが、その男の子が好きなのは清楚な女の子なわけですから、相手が求めていないものでアピールしているのです、(その男の子には)魅力的には映らないということです。

これと、小論文試験もまったく同じです。

その年、その年で学部によって問題も違えば求めているものも違います。そのような細かい機微を敏感に感じとって、相手が求めているものをキチンと書くようにしましょう。そういうわけで、相手が分析力を求めている場合は、分析力をアピールすればいいですが、相手が問題解決能力を求めている場合は、問題解決能力をアピールしなければなりません。

事実ベースで論証する

小論文試験では、論文のように、厳密に実証することは求められていませんが、基本的なスタンスは、自分の考えを延々と書くのではなく、きちんと論証をすることが求められているということを、「慶應小論文合格バイブル」(エール出版社)に書きました。

これはあくまでも原則的な説明ですから例外もあります。プレゼン型の問題の場合や、明らかに（論証なんてさせずに、違った趣旨にしよう！）と大学が決めて問題を作ってきた場合はこの限りではありません。今のところこのような特殊すぎる事例は、環境情報学部以外ではあまり出題されていないようです。時々総合政策学部では出題されるようです。

ここでご紹介したような例外的なケースを除いて、原則的な事を述べれば、気をつけることは何かというと事実（FACT）ベースで論証していくということです。

繰り返しになりますが、あくまでも、書かなくてはならないのは、「自分の考え」ではありません。どういう事実があるのか、あるいは、事実性が高いものがあるのかということですね。あるいは、事実に準ずるものとして、自明性が高いことも同様に小論文試験ではデータとして扱っても大丈夫です。（ギリギリOKです。）

世の中の人が100人いれば、みんなが、『うん』とうなずく事実性が高いこと、一般原則として取り扱ってもいいこと、こういうことをベースとして自分の考えを論理的に構築

していく作業をするのが小論文です。小論文は、主に何を書くかという点、自分の考えではなくて、理由やデータ（ここまでで自明性が高い事と述べたことや、事実、もしくはは事実性が高いことの3つ）です。

データとは何か？

- 1 事実 (FACT)
- 2 事実性が高い事
- 3 自明性が高い事

(世の中の人が100人いれば、みんなが、『うん』とわずく事実性が高い事)

この点に特に注意して、事実と自分の解釈を分けて書きましょう。解釈は好きなように解釈できますので、解釈そのものがそのまま評価されることは基本的にはありません。

むしろ安易に自分の解釈ばかり書いていると、事実から論理的に考える力がないと考えられてしまうリスクがあります。小論文の書き方になっていないと捉えられることもしばしばです。

思考方法のコツ

小論文試験の問題を解く際に、何も考えることができない・・・という悩みを持っている人がいます。

何を手がかりに私たちは考察するべきでしょうか。

基本的に「小論文の試験で考えること」というのは、課題文の内容に書かれているものだけではありません。

課題文に書かれている限定的な話から、一度離れて、頭の中にあるデータを拾い集めて、広い世の中で、課題文の中の内容で書かれていることが、どのように現実に起こっているのか、あるいは、動いているのか、あるいは、作用しているのか、あるいは、実在しているのか、ということを考えられます。

その意味で現代文というのは、提示された課題文そのものの中を詳しく見ていく試験ですが、小論文試験とは、提示された課題文の外側をメインに考察していく試験です。

私たちは、自由に物事を考えることが出来ますし、ゼロから考えなくてはなりません。

その時に少なくとも意識しなければならないことは、その考察の対象を、時間軸や空間を広げることによって広げることです。

ものを考える際には、本質的、原理的にどのようなものがあるのかを、考えなければなりません。つまり私たちは、時間、空間、原理などの観点から、物事を考える必要があるということです。

たとえば、日本の現状について、何かが説かれている課題文が出題されていた場合、その空間を広げて、世界ではどのようなことが言われるのか、他国ではどのような事例があるのか、それから、空間だけではなくて、時間軸を広げて、過去はどうだったのか、

これからはどうなるのか、そして、原理的に考えて、その問題にはどのような原理があるのかを考えていく必要があります。

この「時間、空間、原理などから考える」というのは、思考方法を変えるコツですので、今までやったことがなかった人は、ぜひ試してみてください。ひとつのフレームワークとして、使うことができるようになります。考える幅が広がり始めます。ここでご紹介した内容については、拙著「小論文の教科書」にも詳しく書いています。

局所的に考えると失敗する

物事を考える時に判断ミスをするのは、局所的に考えることが一つの理由です。局所的に考えると言うのは、部分的に考えることです。

たとえば「英語の勉強をどのように行っていけば、実力がつくのか」ということを考える時に、この参考書は使いやすかったのでこれにした・・・とか、友人が使っていておススメということだったので、これにした・・・というような判断は論理的に考えた場合に妥当な判断だと言えるでしょうか。

これが局所的な視点のロジックの例です。その部分では論理として成立しているかもしれませんが、それと英語の実力が間違いなく引きあがるということは、別次元の問題です。重要な判断基準は、以下のようなものです。

- ▼1) 何が目的なのかということ(どの試験に合格したいのか?)
- ▼2) 合格する為に重要な事は何か? (困難性は何と何か)
- ▼3) その本質的な問題を解決する為のアプローチはどのようなものか?
- ▼4) その本質的な問題を解決する際に重要な判断基準(結果に大きな影響を与える因子となっているものは何か?)

① 何が目的なのかということ

当然ですが、まずはどのような種類の英語の試験に合格するのかということを考えなければなりません。受験する英語の試験の種類によって求められる英語の力が少しずつ違うことがありますので、それらの力はどのようなものかということ把握することが最も重要です。

② 合格する為に重要な事は何か?

その試験に存在する困難性は、実質的にはどのようなものかということを考える必要があります。受験というのは、本来は、覚えているかどうかでほとんどが決まります。

ですから、「どのようにすれば多くの記憶を作ることができるのか」ということを考える必要があります。人は目の前にあることを覚えることができます、沢山の量を記憶しようとする、どんどん忘れていきます。従って、ただ単に「頑張る」ということでしたら、問題を解決できない可能性が大了。ただ単に頑張るということではなく、何が問題になっていて記憶することができないのか、ということに対しての本質的な問題をまずは把握しなければなりません。

その上で大量の記憶を作ることができない本質的な問題点に対する対策を立てた上でそれを実行する必要があります。

※注意

ここで特定しなければならないのは、一般的な原因ではなく、「本質的な問題点」です。

原因は複数ありますが、本質的な問題点はひとつしかありません。原因は仮説に過ぎませんが、本質的な問題点は、状況分析に近いものです。

③その本質的な問題点を解決する為のアプローチはどのようなものか？

本質的な問題点が特定できたら、次はどのようにその問題点を解決するのか、その方法を考える必要があります。英語に関してこれはいいかあれがいいというものをただ単にやるというだけでは、当然ですが、問題を解決することは大変難しいわけです。

物事の仕組みや構造を少しも考えることなく、ただ単に目の前に現れている問題に対して対処療法をしようとしているためです。

④その本質的な問題点を解決する際に重要な判断基準

行動を起こすときには、判断基準が必要です。どのように行動すれば、その問題を解決

することができるのか、もう少し具体的に言えば、英語に関して沢山の記憶を作るということができないという問題に対しての本質的な問題点です。これをどのようにすれば解決することができるのかということに関する重要な判断基準が必要です。

概ねここでご紹介したような思考のステップが大きな間違いを起こさない、問題解決のための思考のステップです。

大変雑にご説明してきましたので、とても完璧な思考ではなく、数百分の一に薄められた部分的な解説だというふうにご理解ください。

考察を加える際のステップがいきなり小さな局所的な視点ではなく、大きな部分だということに気づくことができれば、まずは大きな収穫です。第一に、大きなところから考えていきましょう。